

## 訳註『説文解字』序(II)

遠藤 昌弘

A Study of "Shuo wen jie zi" xu (II)

Masahiro ENDO

### 10. 始皇帝の文字の統一について

#### 10. 1 『説文解字』序の本文……………

「秦始皇帝、初兼天下。丞相李斯、乃奏同之、罷其不与秦文合者。斯作倉頡篇、中車府令趙高作爰歷篇、太史令胡毋敬作博學篇。皆取史籀大篆、或頗省改。所謂小篆者也。」

訓読……………

「秦始皇帝、初めて天下を兼ね。丞相李斯、乃ち奏して之を同じくし、其の秦文と合せざる者を罷む。斯は倉頡篇を作し、中車府令の趙高は爰歷篇を作し、太史令の胡毋敬は博學篇を作す。皆史籀の大篆を取り、

或いは頗し省改す。所謂小篆なる者なり。」

訳解……………

「秦の始皇帝（前259～前210在位）は、前二二一年に初めて天下を支配統一した。丞相（注1）の李斯（？～前208）は、そこで始皇帝に奏上して文字を同じくしようとして、その秦の文字のスタイルと一致しないものを廃止した。丞相の李斯は『倉頡篇』を書き、中車府令の趙高（？～前207）は『爰歷篇』を書き、太史令の胡毋敬（生卒不詳）は『博學篇』を書いた。これらはすべて史籀がつくった大篆から文字のスタイルを取ったが、あるいはすこし（注2）の文字については筆画を省いて改めた。いわゆるこれが小篆というものである。」

(二)					部首
木			金		
樹	柳	杞	鈞	鑄	
					金文
					習の位置
					統一
樹	柳	杞	鈞	鑄	小篆

図102b

(一)					部首
辵			方		
					金文のスタイル
					金文
					統一
遲	道	追	旂	族	小篆

図102a

(注1) 丞相は、天子を助けて政治を行なう最高の官職。李斯は始皇帝が天下を巡幸して刻石を建てたとき、侍従して作文奉書したといわれる。

(注2) 「頗し」は「すこぶる」と読ませて、たくさんの意味に解釈するものがあるが、『説文解字』に収める九三三三三のなかで「省改」にあたるものは少数であるため「すこし」と読んだほうが妥当である。

#### 10.2 「小篆」について

小篆は、大篆を省略したものとして説明するものが多い。これは前出の「皆取史籀大篆、或頗省改。所謂小篆者也。」の記載内容をそのまま鵜のみにしたもので、実際に金文などの文字資料と小篆を比較検討すると、増画したものもあり、「省改」が単に省略しただけではないことがわかる。

具体的には、次ぎの(A)～(E)が「省改」の内容として挙げることができる。

(A) 同じ文字でありながら、偏旁(へんとつくり)、とくに今日我々が漢和辞典の部首としてしているところのスタイルが一定してないものがあつたが、これを統一した。挿図(二) 旅・族・旂はおなじへんに属する文字であるが、金文のスタイルは一定していなかった。これをへんに統一して小篆の姿になった。追・道・遅もおなじへんに属する文字であつたが、これも同様に統一された。へんは、漢和辞典の部首ではへんとなつて配列されている。(図102a)

(C) 同じ文字でありながら、ことなった偏旁を持つものがあつたが、これを統一した。挿図(三) 鐘は、旁にあたる「童」が声符となつた文字であるが、「重」を声符とした鍾がある。鐘・鍾は混用されて行なわれていたが、これを「童」として鐘に統一された。城は、偏にあたる「土」へ「享」が混用されて行なわれていたが、これを「土」として城に統一された。(図102c)

(D) 小篆に統一するのに、画数のおおいものは省略して他の文字との調和をはかった。挿図(四) 吾・草・粟などは、小篆に統一する際に、画数のおおいものは省略した。(図102d)

(E) 小篆に統一するのに、画数のすくないものは増画して他の文字との調和をはかった。挿図(五)集・游・涉などは、小篆に統一する際に、画数の少ないものは増画した。なお図のなかの吾・草・栗・游・涉についての「金文など」については『石鼓文』せきこぶんより採った。(図102e)

このようにして小篆はつくられたが、小篆のモデルが『商鞅量』(図102f)にあることを小林斗盦先生は『清人篆書三種』(注1)において指摘している。



图 102 f




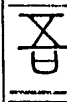











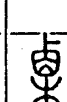





(五)(四)		(三)			
		金文など	城	鐘	
		小篆	城	鐘	
		金文など			
		小篆			
		金文など			
		小篆	土	城	鐘

图 102c

『商鞅量』は、商鞅（?）前338）が制定した度量衡を基準にした量器（計量カップ）である。商鞅は、秦の孝公（前361～前338在位）につかえて法律により国家を治めようとして制度改革をおこなったが、これは「商鞅の変法」と呼ばれている。この制度改革の一環として、商鞅は新しい度量衡を制定した。この時の量器が『商鞅量』である。時を降ること約百年、前二二一年に全土を統一した始皇帝のもとに、法律による国家統治をめざした李斯が理想としたのが、さきほどの「商鞅の変法」である。李斯の制定した量器は、これを実証するかのように『商鞅量』と完全に合致する。こうしたことから文字のスタイルを商鞅量の銘文にもとめ、小篆のモデルが見出されるところから、小篆の遠源を説いている。

（注1）書道技法講座33『清人篆書三種』（1976 二玄社）小  
林斗盦 二頁参照。

## 11. 小篆のその後と、秦書の八体について

### 11. 1 『説文解字』序の本文……

「是時、秦焼滅経書、滌除旧典、大發隸卒、興役戍、官獄職務繁。初有隸書、以趣約易、而古文由此絶矣。自爾秦書有八体。一曰大篆、二曰小篆、三曰刻符、四曰虫書、五曰摹印、六曰署書、七曰殳書、八曰隸書。」

訓読……

「この時、秦は経書を焼滅し、旧典を滌除（てきじょ）（注1）し、おいに隸卒（れいそ）（注2）を発し、役戍（えきじゆ）（注3）を興し、官獄（くわんごく）（注4）の職務繁し。は

じめて隸書あり、もつて約易に趣き、しこうして古文これ（注5）由り絶へり。これ自り秦書八体あり、一に曰く大篆、二に曰く小篆、三に曰く刻符、四に曰く虫書、五に曰く摹印、六に曰く署書、七に曰く殳書、八に曰く隸書。」

（注1）滌除は、（汚れやけがれを）あらいのぞくこと、すすぎのぞくこと。

（注2）隸卒は、別の本には吏卒とある。下級の役人のこと。

（注3）役戍は、別の本には戍役とある。国境警備の兵隊、また国境警備をすること。

（注4）官獄は、役所と裁判所。べつに政府の牢獄とするものもある。

（注5）段玉裁が、爾は此であると注するのに従った。

訳解……

「この時、秦は（国家の統治にあたって）儒経の書を焼滅し、ふるい典籍を滌除（あろ）（注5）、多数の下級の役人を任命し、国境警備の兵隊の配備をすすめ、いよいよ役所や裁判所の職務は繁忙になった。ここではじめて隸書がうまれた、それは簡略化されたものであり、古文はここに途絶えることになった。これより秦書の八体というものは、一つめが大篆、二つめが小篆、三つめが刻符、四つめが虫書、五つめが摹印、六つめが署書、七つめが殳書、八つめが隸書である。」

（注5）「秦は儒経の書を焼滅し、ふるい典籍を滌除（あろ）（注5）は、始皇帝の「焚書坑儒」として司馬遷（前145?～前86?）の『史記』に書かれた。始皇帝が書物を焼き、儒学者を穴埋めにしたこ

とから、学問・思想を圧迫するようになった。

1 1. 2 秦書の八体(大篆・小篆・刻符・虫書・摹印・署書・爰書・隸書)について

『説文解字』の説明によると大篆は、史籀がつくったもの。小篆は、大篆をもととし、すこしについては「省改」したもの。隸書は、「約易」になったものであり、古文の系統はここでは断絶して受けつがれていないとしている。この三体のほかの刻符・虫書・摹印・署書・爰書については直接には触れていない。ただ『説文解字』序のあとに出てくる「新の六書」があるが、虫書・摹印について述べている。虫書は、「新の六書」には鳥虫書と呼んで幡信<sup>はんしん</sup>に書くものであるとしている。幡信は、旗のぼりのこと。摹印は、「新の六書」には繆篆と呼んで摹印であるとしている。摹印は篆刻のことである。

刻符・署書・爰書については、まったく説明していないので、字から解釈するしかないようである。刻符は、符に刻むことで。符とは割り符のことをさし、二つの割り符をそれぞれ一方が所持し後日の証拠とするもの。署書は、おもてがきであり題字のこと。爰書は、爰に書くもの。爰とは、つえほのこと古代の武具である。

### 1 1. 3 大篆・小篆について

はつきりとこれが大篆というものはわかっていないが、小篆ははっきりしてる。それは秦の始皇帝が前二二一年に文字統一をしてすぐの遺品が現存しているためである。『秦二十六年詔権<sup>けん</sup>』というもので、権



図113d



図113c



図113b

ははかりの分銅であり、また『秦二十六年詔楯量』というもので、楯量は楯円形のますである。これらは、前二二一年の度量衡の統一の時のもので、度量衡は、度がものさし、量がます、衡がはかりをさすが、このうちの衡器が『秦二十六年詔楯』にあたり、量器が『秦二十六年詔楯量』にあたる。この衡器と量器に始皇帝が秦二十六年(前二二一)にだした詔勅が銘文としてつけられた、この銘文の文字(図113d)が小篆と考えられている。

これより後に前二一九年から前二一五年にかけて始皇帝が中国各地を巡遊して記念碑を建立した。記念碑には『嶧山刻石』『泰山刻石』『瑯邪台刻石』『之罘刻石』『東觀刻石』『碣石刻石』などがあつたが、このうちの『泰山刻石』(図113c)『瑯邪台刻石』の一部がつたわって現存している。

ただ字姿は、『泰山刻石』『瑯邪台刻石』がたてながに統一されたスタイルをもつのに対して、『權』銘や『量』銘が不揃いであるため、『刻石』が正式体であり、『權』銘『量』銘は権量のかたちにしたがうために不揃いなのではないかと考えられているが定説ではない。しかし、いずれも小篆としてよいものである。

大篆は、全国統一を完成させた前二二一年より以前の秦の文字資料が考えられる。『秦公簋』(図113a)『秦公罇』『秦公鐘』や『石鼓文』(図113b)などがこれにあたると考えられている。

#### 11. 4 虫書について

虫書・摹印は、『説文解字』序にある「新の六書」のところで詳述す

る。(参照14. 新の六書について)

虫書は「新の六書」では鳥虫書と呼んで幡信に書くものであるとしている。幡信は、旗のぼりのことである。じゅうらい鳥虫書は、その言葉から鳥や虫の姿をした文字が想像されていた。このため歴史遺品では『越鳥書矛』『越鳥書劍』があり、一九八一年に東京国立博物館で開催された『中山王国文物展』に展示された青銅器銘文なども鳥書の系統をもつものである。また『金銀象嵌鳥篆文壺』は文字として判読が難しいほど装飾化された鳥書がほどこされている。しかし、このいづれもが青銅器にほどこされた文字であるところから『説文解字』序の「幡信に書くもの」という説明にかなわず疑問がもたれていた。一九七三年に甘肅省から出土した『張掖都尉啓信』があるが、「啓信」とは幡信のことで、これこそが鳥虫書ではないかとされたが、字姿が鳥虫の姿と関係のないことから断定は難しい。このように現在の段階では虫書を定義することはできない。

図114a『中山王壘鼎』(春秋期)、河北省平山県出土。図114b『越鳥書矛』(戦国期)、越は浙江省の古称。図114c『金銀象嵌鳥篆文壺』(前漢)、河北省滿城県出土。図114d『張掖都尉啓信』(前漢末・新)、甘肅省居延県出土。

#### 11. 5 摹印について

摹印は、「新の六書」には繆篆と呼んで摹印であるとしている。摹印は篆刻のこと。印の歴史は古く殷代にまでさかのぼるとされ、殷璽とされるものが台北故宫博物院に三顆あるが、現在にいたるまで殷代遺

蹟から印の出土例はなく、いまのところ印の始まりは春秋戦国の頃とされている。はじめ印は「璽」と呼ばれていて、秦によって統一される以前のものはすべて「古璽」と呼んだ。統一以後は官印（役名印）と私印（姓名印）は区別され、官印は皇帝に「璽」をもちい、臣下に「印」をもちいた。また宮廷に朝貢した周辺国には印を賜与したが、これは蛮夷印と呼ばれる。

図115a古璽「異耳」（戦国期）。図115b官印「皇后之璽」（前漢）。図115c私印「李君興印」（新？）、この糸をまいたようなスタイルのものをとくに繆篆と呼んで区別するものもある。図115d蛮夷印「漢委奴国王」（後漢）、国宝の金印である。

# 11. 6 刻符について

刻符は、符に刻むことで。符とは割り符のことをさし、二つの割り符をそれぞれ一方が所持し後日の証拠とするもの。秦漢時代には、銅虎符・竹使符が用いられた。銅虎符は虎の形をした銅製の割り符で、銅虎符の一片を皇帝が一片を軍指令官が所持した。地方の軍隊を動かす場合、使者が皇帝の銅虎符を持参して軍指令官のものと合致すると、はじめて行なわれるとされる。銅虎符には『陽陵虎符』と『新郢虎符』などがある。竹使符は郡の長官がもちいたもので竹製の割り符である。

図116a『陽陵虎符』（秦）。銘文には「甲兵之符。右在皇帝。左在陽陵。」とあり、「甲兵の符は、右は皇帝に在り、左は陽陵にあり。」と読める。



図114c



図115b



図115a



図115d



図115c



図114d



図114b



図114a



図118b

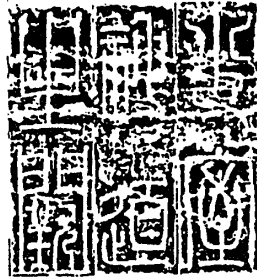


図117b

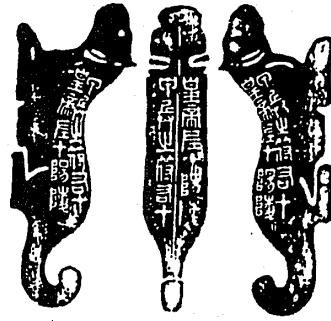


図116a

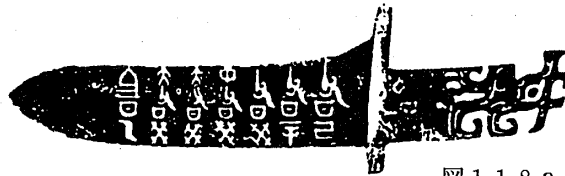


図118a



図117a

# 11. 7 署書について

署書は、おもてがきであり題字のこと。署書のふるいものには『嵩山少室石闕銘』や『嵩山太室石闕銘』などが、はっきりと判明しているものである。一九七八年に河南省唐河県から出土した『鬱平大尹馮君孺久墓』の題字はさらにふるく、『嵩山小室石闕銘』よりさらに百年ほどさかのぼる。この墓の題字の一つである「鬱平大尹馮君孺久中大門」は「鬱・君・孺・久」の字が、これまでに例をみない字姿であることから署書のための書様式ではないかと考えられている。

図117a『鬱平大尹馮君孺久墓』題字(新)。図117b『嵩山少室石闕銘』(後漢)。

# 11. 8 爰書について

爰書は、爰に書くもの。爰とは、つえほこのことで古代の武具であり農民が戦争に徴発されたときに持参したとされる。ここでは爰に限らず武器全般をさすと考えてよい。武器に文字をほどこす例はふるく殷の『祖日乙勾兵』などにはじまり、一九六五年に湖北省江陵県から出土した『越王勾踐剣』は春秋期のもので、戦国期には『越鳥書矛』『越鳥書剣』『吉日剣』『大公子剣』など、その例は多い。

図118a『祖日乙勾兵』(殷)。図118b『越王勾踐剣』(春秋期)。

# 11. 9 隷書について

隷書という言葉には、さまざまな内容を含んでいる。西川寧博士の



解説による「敦煌樓蘭古文書展」図録（一九八三）には「古隸」<sup>これい</sup>「隸書（八分）」<sup>そうれい</sup>「草隸」を取り上げている。また中国では『安吳論書』を著わした包世臣は、「国朝書品」のなかで当時の名人のランクづけをしているが、このときの分類に「隸書」「分書」<sup>ぶんしょ</sup>をわけている。また、隸書という言葉はのちの楷書をさすようになり、その当時に使われていた書体を隸書として呼んでいて、のちには「隸書」と「楷書」は区別されるようになる。『説文解字』序の「秦の八体」の最後の八番目に隸書がくるのも、当時ふだんに使われていた書体のために最後につけられたものと考えられる。

いぜんには隷書の発展は、古隸から隸書へと移行したと考えられていたが、『五鳳二年刻石』（前五六）や『萊子侯刻石』（二六）などの古隸の時期と考えられていた頃に美しい波勢をもつ五鳳元年（前五七）簡が出土したことによって、隸書と古隸が平行していたことが明らかになった。このことから古隸というものが隸書の未発達の様ではなく一つのスタイルへの呼称として考えられるようになった。

☒ 1 1 9 c

☒ 1 1 9 d

图 119 e

图 1 1 9 f

の限界はひどくぼんやりしている」としている。ただこうした言葉も近年の中国西域よりの大量の木簡資料の出土により隷書のスタイルが多様化していて、じゅうらいの「古隸」「隸書（八分）」ではまかないきれないために「草隸」という言葉が加えられたようである。前述した包世臣のころはこれらの木簡資料は知らないわけであるから分類に「草隸」がないのは当然のことである。なお後漢の趙壹ちゆういつが著わした『非

五鳳二年刻石  
馬王堆漢簡・帛書  
臨沂銀雀山漢簡  
秦簡

図122a

馬王堆漢簡・帛書

図122b

五鳳二年刻石

図122c

臨沂銀雀山漢簡

秦簡

図122d

馬王堆漢簡・帛書

草書』には「隸草」という言葉がでてくるが、具体的な書体としての  
独立した内容をもつものではない。

こうして言葉をそろえることで、字のスタイルを整理分類してきた  
が、近年発見の資料には篆書と隸書の両体を合わせもつような『雲夢  
秦簡』『馬王堆漢簡・帛書』『臨沂銀雀山漢簡』などがあらわれるよう  
になると、じゅうらいの書体による区分では整理することが困難であ  
り、書体という考え方のものを根本的に変更する必要にせまられて  
いるのである。

図119a『雲夢秦簡』(秦)。図119b『馬王堆帛書』(前漢)。

図119c古隸『五鳳二年刻石』(前五六)。図119d隸書五鳳元年  
(前五七)簡。図119e草隸の木簡。図119f隸書『乙瑛碑』(一  
五三)。

## 12. 草書のはじまりと漢の官吏の教養について

### 12. 1 『説文解字』序の本文……

「漢興有艸書。尉律、学僮十七已上始試。諷籀書九千字、乃得為史。  
又以八体試之、郡移太史并課。最者以為尚書史。書或不正、輒举劾之。  
今雖有尉律不課、小学不修、莫達其說久矣。」

訓読……

「漢興りて艸書有り。尉律は、学僮の十七已上始めて試む。籀書九千  
字を諷すれば、乃ち史と為るを得。又た八体を以て之に試み、郡は太  
史に移し并せて課す。最なる者は以て尚書史と為す。書或いは正しか  
らざれば、輒ち挙げて之を劾す。今尉律有りと雖も課さず、小学修ま

らず、其説を達する莫きこと久し。」

訳解……

「漢朝が興つて、はじめて草書が生れた。尉の法律には、学童は十七歳以上になると始めて試験を実施した。籀書を九千字を暗誦すると、そこで書記となることができた。また秦書八体について合格した書記に試験をくわえ、郡においては太史令にも（九千字の暗誦、八体の修得を）あわせて試験した。成績優秀者は尚書史とした。書がもし正しくなければ、ただちに指摘して之を正した。しかしながら今日、尉の法律があるにもかかわらず、（書記官の）文字学は修まらず、その法律の条文を徹底することがなくなつて久しい。」

文中の「籀書」は書記官の読むべき書物であり、ここでの「籀」は籀文という書体ではない。「籀」は「読」として、「諷籀」は「諷読」（そらんじ読む）と解釈するものもある。「艸」は「草」とおなじ。

## 12. 2 草書について

「漢興りて艸書あり。」は古来より唱えられてきたが、近年の中国西域の大量の木簡による肉筆資料の出現は、この言葉を歴史事実として証明した。もつともふるい年号をもつものは天漢三年（前九八）の木簡である。また神爵四年（前五八）、建武三二年（五五）、永平十一年（六八）のものも確認できる。

しかしここで重要なのは、すでに述べてきた秦の八体にも、のちに述べることになる新の六書にも、草書が書体として含まれていないことである。つまり、それほど私的なものであつて公的には決して取り

扱われることのない、非公式なスタイルであると考えられていたようである。許慎の草書に坎んする記述は、わずかに五文字を費やしたにすぎないが当時の書の状況を物語っている。『説文解字』という非常に正式であり厳格な内容をもつ書物を著わした許慎ですら草書に触れないわけにはいかないほど、草書は流行していたと考えられる。つぎに草書が述べられるのは許慎にすこしおくれで趙壹の『非草書』があるが、これも内容は当時における草書の流行を非難し、文字を本来の正しい姿にかえすべきことを述べたもので、やはり草書を否定している。草書をひとつの書体として認識して記述したのは衛恒（252-292）の『四体書勢』である。許慎や趙壹のころからおおむね百年を待つことになる。

図122a 天漢三年（前九八）簡。図122b 神爵四年（前五八）

簡。図122c 建武三二年（五五）簡。図122d 永平十一年（六八）簡。